
伝染神

星見

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伝染神

【Nコード】

N5095D

【作者名】

星見

【あらすじ】

心霊スポットへ行った僕は、そこで非現実的な現象を垣間見ました――。

こんばんは

もしくはこんにちは。

僕は鈴木孝太郎。

一応大学生。

これからする話は、突拍子もない話で、現実味に欠けてるかもしれないけど、確かに事実なんです。

僕は大学生で、心霊研究のサークルに入っている。といっても幽霊を信じている訳じゃないんです。僕は心霊現象否定派。

…あくまで、少し前まで、だけど。

僕の所属する心霊現象部では、月に一回の頻度で、有名な心霊スポットに行くことになっているんです。

もちろん、僕も行っただんですが。

そして“遭遇”したんです。彼ら… 闇狩りと。

++++

足音の家。僕らが行ったのはそう呼ばれる古い日本家屋。

外装は古めかしい木製で、一階建ての一戸建て。だいが朽ちてきていて、いかにもという雰囲気醸し出しています。

「おー、なんか出そうだな」

一緒にきた先輩が呑気にいつていました。

因みに、この家に来たのは僕を含めて四人。全員霊研部員です。

ぎいしいい

玄関へ入ると、埃まみれの床が僕らの体重に抗議します。家の内
部は夕方ということもあり、懐中電灯の光が頼りなく朽ち果てた様
相を照らしていて、流石に不気味でした。

「先輩…帰りましょう…」

誰かがポツリと言いました。声色には恐怖が滲んでいます。

「なに言っただよ。まだ玄関だぞ」

そういうなり先輩はギシギシと軋む床を踏み鳴らしながら奥へ進
み出しました。部員たちも恐々進みます。

僕は正直帰りたかったです。物凄く埃っぽくて…。

……て……

「ん？誰かなにか言っただか？」

居間らしき部屋まで来た所で部長が突然言った。もちろん誰も言
葉を発してなどいない。

「誰もなにも言っていないですよ」
「だが確かに…」

……ま………

「！！」

「聴こえた…？」

部員が口々に言います。興奮している者、恐怖で青ざめているものなど様々です。
もちろん自分にも聴こえました。

「じ…冗談だよな？」

渴いた声を部長が漏らす、誰もなにも言わない。

「で…でよう！気持ち悪い」

「あ…ああ…」

「ちよっ…おまえら…」

部員二人が勝手に部屋から出ようとした所を部長が慌てて止めようとした。ところが…

…ま………て…

再び声が響きました。底冷えする、低いけれど高い、矛盾した女の声…。

「う…うわぁぁぁ！」

それが合図でした…。

絶叫した彼らは我先にと押しへしあい、逃げるように出ていきました。

その騒ぎで僕は懐中電灯を思いきり落としてしまい、一人暗闇の中ポツンと取り残されてしまったんです…。

闇

コレは恐ろしいものです。

視覚が働かなくなると、別の感覚——聴覚が敏感になるようです。僕もそうでした。

がたがたがたがたがたがたがた

開きの笑い襖を無理やり開けるように、幾度も音がします。

がたがたがたがたがたがたがた…ぺた…ぺた…

やがて、音が湿った足音に変わりました。

僕は微動だにできませんでした。肌から吹き出す気持ち悪い汗、こわばり、震える体——。

これが恐怖というのなら、僕は二度と体感したくありません…。

ぺた…ぺた…ぺた…

湿った、裸足の足音。少し遠くから、じわじわと、ゆっくり近付

いてくる――。

「あ……あ……」

無意識に渴いた声が零れます。

ぞわり、肌が泡立ち、腰骨から内臓と背骨を伝い、沸き上がる寒気。

ぺた………

やがて、足音が止まる。

ぎしいあああああ

床が独りでに響く。いや、嘲笑する。

「はっ……はっ……」

息が、動悸が、恐怖が、激しく高鳴る。

そして…。

『…み…づ……けた…』

女が嘲笑いました。僕を見て。

白と赤の、紅葉の柄をしたボロボロな着物を不自然なほど着くずして、ずるりと、女が流れる。比喻ではなく、僕にはそう見えませんでした。

不気味なほどゆっくりに、女は静かに動きます。体の間接が全て抵抗力をなくしたように、だらんと垂らして、僕へ向かってきます。

『わた…し……を…みて…』

血の気も生気も無い、青白い手が、僕へ向かって降り出されます。せまるその手を、女を前に、僕の周りの空気は鉛のように重く、

冷え切っていました。

『こ……こ……よ……』

重く、響く声が僕を捉えます。そして女の手が僕に触れるか触れないかというところで――

「伏せる」

闇が、切り裂かれた――。

「えっ……」

ひゅおっ、風を切る音が女に突き刺さりました。

『あ……ああああああああ…… ああ……』

僕の頬を掠め、女に突き刺さったのは、闇でもなぜかハッキリと解る“槍”。

いとも簡単に女の華奢な体躯を吹き飛ばし、腹部に風穴を開けた槍が放たれたところ、つまり僕の背後から、ギシィと床の悲鳴が聞こえます。

「大丈夫か？」

僕に声をかけてきたのは、闇に同化するような真っ黒な服を着た男でした。

「あ……なた……は……？」

僕の質問は途切れ途切れで掠れていましたが、一度僕に視線を合わせたのでおそらく伝わっていたんだと思います。

男は僕の脇をすり抜け、壁に打ちつけられている女に向かいました。

「これはな……、伝染神　っていう存在だ」

振り返らずに男は言いました。

「はやりがみ？」

「そう、言ってしまえば幽霊と同じ」

ガシッと女に突き刺さったままの槍をつかみ、女を両断するように大きく振り切った。

ばあああああん

まるで空気がはぜるように、女の姿は霧散し、重苦しい空気も一気に消え失せました。

「……あなたは……」

「俺は 闇狩り。社会の裏に存在する闇を狩る存在」

ひゅん、と槍を振るうと男は僕に向かっていいました。

「ここから早く出た方がいい。まだ 彼ら は君を見てる」

「えっ……？」

まだ見ている？あんなのが？

「ここから直ぐ其処の窓、そこから出られる。まだ近くに居ないから、早く行ったほうがいい」

男の槍の切っ先で指す方向を見ると、闇の中に微かに光が見えました。

「ありが……」

礼を言おうと再び視線を戻した時には、黒服の彼の姿はどこにもありませんでした。

+++++

その後、彼に言われた通りに窓を抜けると、簡単に外に出られました。

既に宵でしたが、家の中よりずっと明るく、平和でした。

僕より先に逃げていた先輩たちは、なぜか来たときに乗ってきた車の前に座り込んでいました。

話を聞くと、なぜ自分たちがここに居るのか、さっぱり思い出せないらしく、狐につままれたような表情でした。

この経験は、あまりに非現実的です。信じてもらおうとは思いません。

ですが、この経験で僕は学びました。

世界にはこういった現象があるということを――。

これから僕は不用意に心霊スポットには近づかないようにします。

皆さんも、気をつけて――。

「天義さーん」

「隆地、遅かったな」

「いや、天義さんが勝手に行ったんじゃないッスか？雑魚ばっか俺に押し付けて」

「悪い悪い」

「まあいいッスけど…。ああ、そういえばさっき大学生たちがたがた震えてたんで 即席修正スプレー07 使って少し記憶削りました」

「そうか。……！」

「きましたね」

「ああ…。さて、いくぜ隆地、狩りだ——。」

（後書き）

スイマセン！まず謝ります。

ホラーの描写ははつきりいつて前半だけ、後半はファンタジーっぽいです。

この2つを上手く馴染ませるのが目標です。

一応作者のなかではオカルトホラーファンタジーなんですが、どうもしっくりきません。

ちなみに伝染神はやりがみと読めます。

噂神とリンクしてますが、これらの違いはおいおい明らかになります。

では、読んでいただけて本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5095d/>

伝染神

2010年12月4日14時56分発行